開府500年を学ぶ No.1

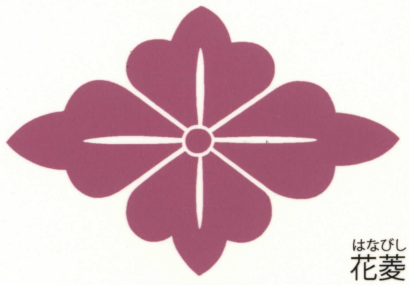
武田氏館の誕生

戦国時代は、日本全国で合戦が繰り返され、甲斐の国と言われた山梨でも地域の有力な武士たちの間で争いが続いていました。

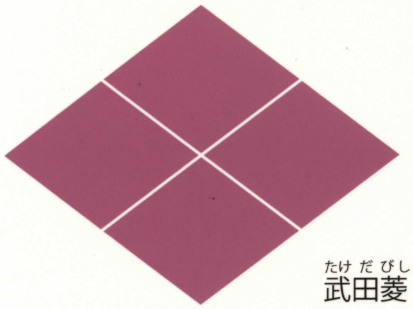
武田信玄の父、信虎は甲斐の国を一つにまとめ、国を治めるためにつつじが崎の地（甲府市古府中町）に新しく館をつくり、移り住みました。

大正時代に建てられた武田神社のある場所が約 500 年前の 1519 年に信虎が新しくつくった武田氏館で、つつじが崎の館の別名で知られています。館のまわりには家臣たちを住まわせ、新な城下町が誕生しました。その町が甲府です。武田氏館が誕生していなかったら、現在の県都甲府市は存在していなかったかもしれません。

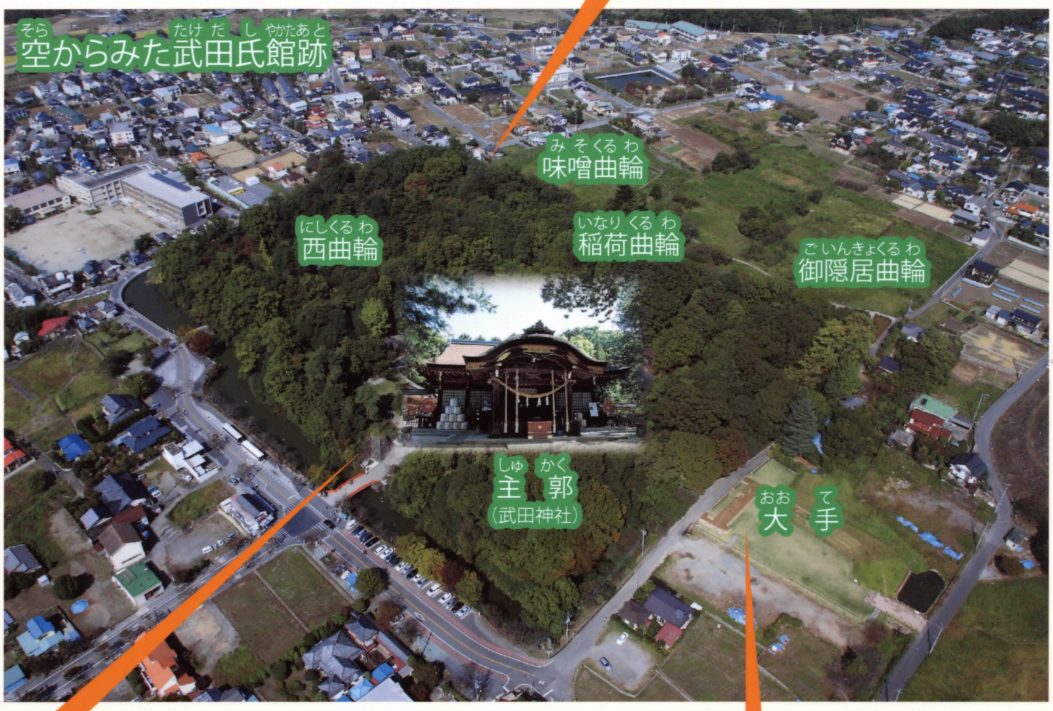
武田家の家紋



花菱



武田菱



武田信虎、信玄、勝頼が当時生活していた場所は、主郭と呼ばれる武田氏館の中心です。現在は、武田通りから橋を渡って階段を上りますが、当時は、東側出入口が正門で、信玄も通った道です。

主郭の周りには、堀と土手状の土塁で囲まれた曲輪がつくられ、武田家が滅んだ後も甲府駅周辺にある甲府城が完成するまで使用されたようです。館の中には当時、敵から身を守るために造られた施設が出入口などに残されています。

掲載画像出典　全景写真：山梨歴史美術研究会、他は甲府市教育委員会